

序

羊土社が懲りずにまた輸液の本を出版しました。買うべきか、買わざるべきか。ため息をつく前に、ここで少し時間をかけて考えてみましょう。輸液の専門科とはどの科を指すのでしょうか。やはり水と電解質、そしてアシドーシスの補正に長けた腎臓内科でしょうか。それともいろんな重症患者の初療にかかわることでは経験数が豊富な救急科でしょうか。でも、どの科の先輩先生方も、しっかり輸液の指示を出し、患者さんはそれによって回復していきます（実は適当に輸液を選んでそれなりの速度で点滴すれば、患者さんが自分の力で治っているのではないか、と思われる節もありますが…）。ということは、輸液について、医者たるもの“大抵のこと”はわかっているのが“常識”的なようです。

この本の総論の1～3には『今さら聞けない輸液のキホン』として、その“大抵のこと”と“常識”が記載されています。そこを読んでだいたい理解できる想定内であれば、まず輸液の臨床能力は順調に進化していると考えてよいと思います。それ以上に輸液療法について興味がないければ、この本を買う必要はないでしょう。

もし、若い研修医への輸液教育に携わる可能性のある方、自分で出している輸液についてもう少し自信をもって指示出ししたい方には、総論の4がお勧めです。初期研修を終え、自分で診断し、自分で治療できる立場になった後期研修医向けのTipsが詰め込まれています。ここもだいたい頭に入っているという方も、この本を買う必要はありません。

総論を読んで、なるほど!!と相槌を打った部分のある人は、第1章以降もきっと役に立ちます。それぞれの科の専門の先生方に、今後頻繁に出会うことになる重要疾患の初療とその後の管理に際して、輸液の視点から記述してもらっています。この章まで店頭で読むのは時間がかかりますし、書店の店員にもきっと嫌がられますので、その場合には購入をお勧めします。主要な症候に対する初期輸液（第1章）、診断確定後に変更する輸液の内容とタイミングについて（第2章），“大抵のこと”と“常識”を超えた一段上の輸液のコツを学べます。

さらに、輸液を極めたい方向けには、第3章【Advanced】と第4章【Expertise】が準備されています。ここには最新のエビデンスもお墨付きのガイドラインもない、ただのカンのみが存在している内容もあるかもしれません。しかし、そこは私が伏して執筆をお願いした臨床経験豊富な臨床医ばかりです。ここでしか聞けない、長い臨床現場の経験から身につけた役立つ輸液療法のpearlsがたくさん隠されているはずです。読者のみなさんにとっては会ったこともない先輩達ですが、この本でネーベンとなって輸液療法の真髄を疑似体験して、明日からはあなたが自分の受け持ち患者から手に入る輸液の成功体験を増やしていくください。

読み終わった後には、新しくやってきた後輩医師たちを前にして、経験とエビデンスに裏打ちされた輸液療法を誇らしげに伝授している自分の姿が瞼に浮かんでくるはずです。

2011年10月

昭和大学医学部救急医学 准教授
昭和大学病院救命救急センター センター長
三宅 康史